

人類学の歴史学に対する貢献 —川田順造の仕事をどう受け継ぐか—

中尾世治（京都大学）

「日本語での思考と諸学の「はみ出し」方：川田順造を
起点とした「かかわりあい」からみた社会史」

小綿哲（京都大学）

「日本の歴史学にとっての川田順造」

原聖（女子美術大学）

「西欧における国家横断的貴族社会の成立と近代国家への
影響—言語移転から考える」

日時：2025年11月29日（土）15:00～18:00

場所：神奈川大学横浜キャンパス9号館12室（日本常民文化研究所）



スケジュールと発表要旨

15:00-15:10

趣旨説明：原聖（女子美術大学）

15:10-15:45

中尾世治（京都大学）

「日本語での思考と諸学の「はみ出し」方：川田順造を起点とした「かかわりあい」からみた社会史」

要旨：本発表では、1970年代後半から1980年代後半までの社会史の興隆とその意義について、川田順造と彼のかかわる人びとを軸に、歴史学と関連諸学との連動のなかで捉えることを試みる。ここでは、平凡社「エリアの会」、AA研「口頭伝承の比較研究」、『社会史研究』などの、編集者・「共同利用研究所」・雑誌を媒介とした「かかわりあい（sociabilité）」をとりあげつつ、川田順造や坂部恵らの日本語の術語化と文体への意識が特定の学問分野を「はみ出し」て、社会史研究を牽引した歴史学者と共鳴しつつ、それぞれに展開していたことを論じる。

15:45-16:30

小綿哲（京都大学）

「日本の歴史学にとっての川田順造」

要旨：現在、社会史研究は幾度目かの「ブーム」を迎え、社会史の史学史がさまざまな形で論及されている。その際、日本における初めての「ブーム」と目されるのは1970年代であるが、歴史学者以外で大きな存在感を示していた人類学者の川田順造について、今日の歴史学からの言及はなぜか限定的である。本発表ではこの疑問を出発点に、1970年代になぜ川田と日本の歴史学者たちが共振したのか、また、なぜその共振は忘れられていったのか、そしてそのことは今日何を意味するのかを、とりわけ川田と二宮宏之の著作、また歴史学諸学会における社会史に対する「反省」を題材として考えたい。

16:30-16:45

休憩

16:45-17:30

原聖（女子美術大学）

「西欧における国家横断的貴族社会の成立と近代国家への影響—言語移転から考える」

「川田順造（編）『ヨーロッパの基層文化』（1995年）の巻頭論文「ヨーロッパ、近代、基層文化」の中で川田は、「ヨーロッパ各地に支配を樹立したノルマンの王のうちでも「征服者」の異名をもつギヨーム（ウィリアム）の男系女系の子孫は、現代ヨーロッパの王族のほとんどすべての中に見出される」（32頁）と書き、「人権や平等や民主主義の理念を生み、共和国を実現し、それらを普遍性をもった理念や制度として非ヨーロッパ世界に輸出したのは近代ヨーロッパだったが、いま世界で王国が最も多い地域も、ほかならぬそのヨーロッパだ。近代的な立憲君主制では、王や女王は毒抜きがしてあるというかもしれない。だが理屈はともかく、ヨーロッパ人が王様や女王様が好きなことは確かで、だからこそヨーロッパは、世界で最も多く王国と王族が温存されている地域なのであろう」（34頁）と述べた。本報告では、ギヨーム征服王の歴史上の位置とその果たした役割を言語移転の観点から論じ、モナコのような極小国からEUのような国家連合が存在する欧州の現代国家を再考する糸口としたい。

なお参考文献として拙稿「言語接触と文化移転—西欧前近代の事例から」（史学会ほか（編）『東北史を開く』（2015年））がある。

17:30-18:00

総合討論